資料２－１

県内児童生徒の学力の推移について

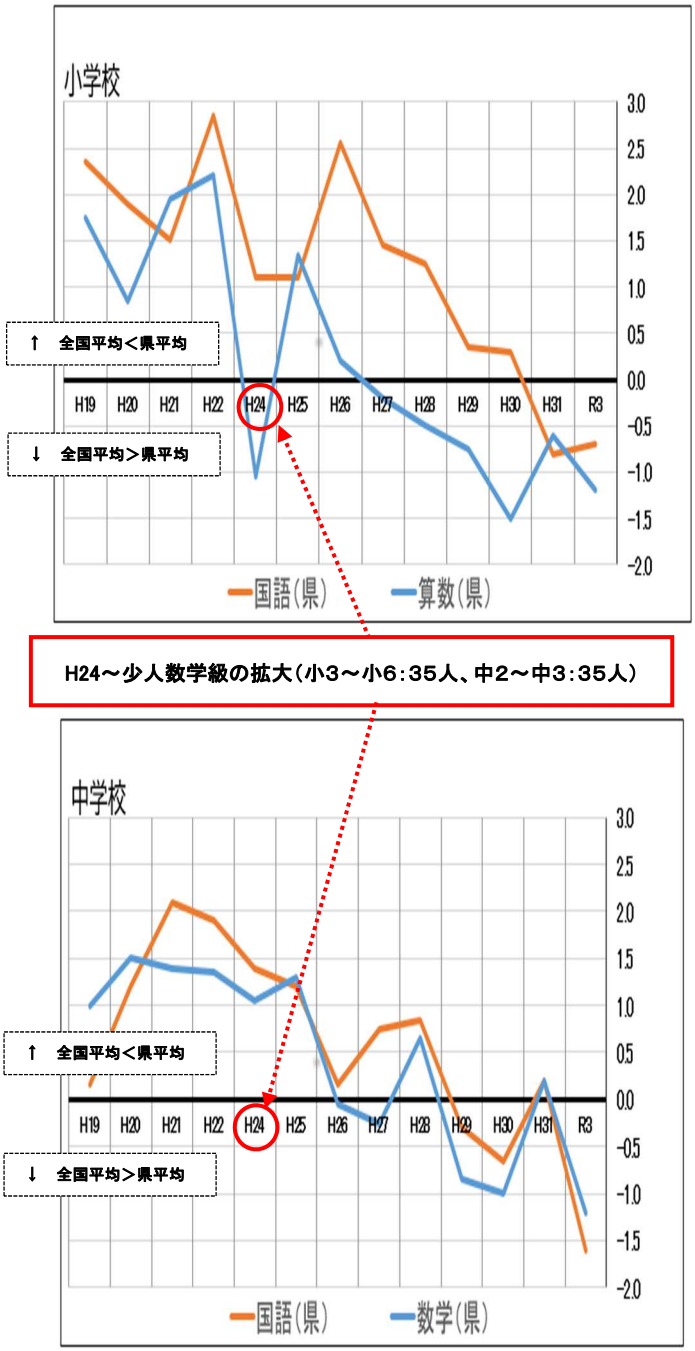
１　全国学力・学習状況調査結果（国語・算数（数学））にみる学力の推移（全国比較）

【国語及び算数（数学）の平均正答率の推移（全国比）】

【小学校6年（公立）】　［単位　：　%］

	国語			算数		
	本県	全国	差	本県	全国	差
R3	64.0	64.7	△ 0.70	69.0	70.2	△ 1.20
H31	63.0	63.8	△ 0.80	66.0	66.6	△ 0.60
H30	63.0	62.7	0.30	56.0	57.5	△ 1.50
H29	66.5	66.15	0.35	61.5	62.25	△ 0.75
H28	66.6	65.35	1.25	61.9	62.4	△ 0.50
H27	69.15	67.7	1.45	59.9	60.1	△ 0.20
H26	66.75	64.2	2.55	68.35	68.15	0.20
H25	57.15	56.05	1.10	69.15	67.8	1.35
H24	69.7	68.6	1.10	65.05	66.1	△ 1.05
H22	83.4	80.55	2.85	63.95	61.75	2.20
H21	61.7	60.2	1.50	68.7	66.75	1.95
H20	59.85	57.95	1.90	62.75	61.9	0.85
H19	74.2	71.85	2.35	74.6	72.85	1.75

【全国平均を「0.0」とした際のポイント差の推移】



【中学校3年（公立）】　［単位　：　%］

	国語			数学		
	本県	全国	差	本県	全国	差
R3	63.0	64.6	△ 1.60	56.0	57.2	△ 1.20
H31	73.0	72.8	0.20	60.0	59.8	0.20
H30	68.0	68.65	△ 0.65	55.5	56.5	△ 1.00
H29	74.5	74.8	△ 0.30	55.5	56.35	△ 0.85
H28	71.9	71.05	0.85	53.8	53.15	0.65
H27	71.55	70.8	0.75	52.75	53.0	△ 0.25
H26	65.35	65.2	0.15	63.55	63.6	△ 0.05
H25	73.1	71.9	1.20	53.9	52.6	1.30
H24	70.6	69.2	1.40	56.75	55.7	1.05
H22	72.1	70.2	1.90	55.3	53.95	1.35
H21	77.85	75.75	2.10	61.2	59.8	1.40
H20	68.4	67.2	1.20	57.65	56.15	1.50
H19	76.95	76.8	0.15	67.25	66.25	1.00

（全国学力学習状況調査）

・　平成１９年に全国学力・学習状況調査がスタートして以降、平均正答率が全国平均を下回ることは無かったが、平成２４年に初めて、小学校算数で全国平均を下回った。

・　以後、小・中学校の国語、算数（数学）両教科において全国平均を下回る状況が継続するとともに、全国平均とのポイント差も縮まらない状況にあるなど、学力は伸び悩んでいる。

２　英語教育実施状況調査における一定以上の英語レベルにある生徒の推移

※国の「第3期教育振興基本計画」では、中学校卒業段階で CEFR A1 レベル相当以上を達成した中学生の割合 50%、高等学校卒業段階で CEFR A2 レベル相当以上を達成した高校生の割合 50%を目標とする。

【中学校】・・・CEFR A1レベル（英検３級）相当以上を達成していると思われる者の割合

		H25	H26	H27	H28	H29	H30	R１	R2	R3
中学校	全国	32.2%	34.6%	36.6%	36.1%	40.7%	42.6%	44.0%	実施なし	47.0%
３年生	鳥取県	33.5%	32.0%	40.7%	34.4%	35.7%	37.1%	38.8%		40.3%

【高等学校】・・・CEFR A２レベル（英検準２級）相当以上を達成していると思われる者の割合

		H25	H26	H27	H28	H29	H30	R１	R2	R3
高校	全国	31.0%	31.9%	34.3%	36.4%	39.3%	40.2%	43.6%	実施なし	46.1%
３年生	鳥取県	36.8%	38.9%	35.0%	33.9%	36.5%	33.3%	42.7%		45.8%

（英語教育）
・平成２８年以降、中学校、高等学校とも全国平均値を下回っている。

３　まとめ

全国に先んじて進めてきた少人数学級では、児童生徒一人一人に向き合う時間の増大や、見立ての深まり、指導の工夫改善を通じて、学びの質を高め、学力向上、体力向上、困り感を抱える児童生徒への細やかな対応の期待があるが、成果に結びついていない状況。

→見える形で具体の成果を上げていくには、少人数学級の維持・拡充のみならず、一層の指導改善や、学びの質を高める抜本的な改革が望まれるのではないか。